



町に溶け込む 障害者

障害者が使いやすい道具の工夫を学ぶ高校生ら10月10日、別府市内蔵の太陽ミュージアム 撮影・山手孝哉



共に、
らしく
太陽の家60周年
〈〈4〉〉

地域で働き、余暇楽しむ

10月上旬、別府市内蔵の社会福祉法人「太陽の家」に、明豊高(同市)の1年生7人が訪れた。資料館「太陽ミュージアム」で職員の家内を受けながら、障害者の自立について学んだ。進路選択などに役立てる

探究学習の一環で、太陽の家やパラリンピックの歴史、障害のある人のために考案した道具を熱心に見学。車椅子の試乗もした。生徒の一人、岡鉄馬さん(16)は「障害者と一緒に働くためのアイデアや技術、合理的配慮の意味を学ぶことができた」と感心した様子で語った。ミュージアムは2020年、障害者の仕事や生活、スポーツを体験し、楽しさや工夫を知ってもらおうと開館した。来場者は年々増



太陽の家創立60周年の記念イベントで、ギネス世界記録達成を祝う参加者ら

え、昨年度は7654人。学校だけでなく、県内外の企業の見学も絶えない。「障害者の雇用率アップが求められる中、一緒に働く企業の社員らが研修で訪れる機会が増えている」と担当職員は説明する。

一緒に「福祉の町」

障害の有無にかかわらず分け隔てなく暮らす「共生社会」。太陽の家を創設した中村裕博士は生前

「身障者だけの社会をつくるてはいけない」と考え、「地域の皆さんと一緒に暮らす太陽の町づくりを進めていきたい」と呼びかけていた。

今、太陽の家がある別府市亀川地区は、多くの障害者が自然に町に溶け込んでいる。

障害福祉の課題に取り組む「福祉フォーラム in 別府」の河野龍児代表理事(57)は「障害者が働き、余暇を楽しむために町に出たことで、共生が進んだ。太陽

の家の存在が、互いに尊重し、支え合える真の共生社会の実現に向け、太陽の家は歩み続ける。(佐藤弘子 終わり)

河野龍児さん 自身も



頸椎損傷で重度の障害があり、「車椅子を利用する私が1人だと、必ず誰かが声をかけてくれる。別府は物理的な段差だけでなく、心のバリアも少ない」と話す。一方、外見では分かりにくい障害への理解不足や偏見はまだ残っていると指摘する。

186組たすきつなぐ

10月4日、太陽の家で60周年の記念イベントが開かれた。50リレーでたすきをつなぐ人数のギネス世界記録に挑戦。障害のある、地域の子どもや高齢者、留学生らも参加し、エールを送り合った。186組の記録を達成して全員で喜んだ。

佐藤光博事務局長(61)は「走るスピードは全然違いうけど、みんなが一つになった時間だった。共生社会の推進は永遠のテーマだ」と語る。

山下達夫理事長(66)は「いつか太陽の家など特別な存在がなくなるような社会になってほしい」と力を込める。互いに尊重し、支え合える真の共生社会の実現に向け、太陽の家は歩み続ける。(佐藤弘子 終わり)



〔問①〕 明豊高の岡鉄馬さんは「合理的配慮の意味を学ぶことができた」と語っています。
「合理的配慮」とはどういう意味でしょうか。調べてみましょう」

〔問②〕 太陽の家の山下理事長は真の共生社会の実現に向けてどのようなようになってほしいと言っていますか。

「 」

〔問③〕 この記事は創立60周年を迎えた「太陽の家」のこれまでの歩みを振り返りながら、障害者と障害のない人が分け隔てなく暮らす「共生社会」について伝えています。あなたは「共生社会」の実現に向けてどのような取り組みが必要だと考えますか。書いてみましょう。また、周りの人とも意見交換してみましょう。